

四国初オペラ「二人奥方」制作について

若 井 健 司

キーワード：地方のオペラ創り、四国初オペラ、瀬川拓男・菅野浩和作品

はじめに

オペラ「二人奥方」の存在を知ったのは、2003年のことである。当時香川県芸術祭の運営委員をされていた八木亮三氏から渡された古い資料によるものだった。香川の演劇界を牽引していた八木氏とは、芸術専門分野の違いもあり、なかなかお会いする機会はなかったが、私がオーストリア留学から帰国した2001年に、NPO法人アーツカウンシル高松(高松芸術文化市民協議会／ACT)(以下、「アーツカウンシル高松」という。)の音楽ディレクターに就任した頃から親交が始まった。その頃、2004年に完成する新しい高松市の市民会館(現在のサンポートホール高松)の開館を見据えて、市民会館・高松市市民文化祭の在り方の見直しが協議され、芸術団体の新たな協力体制の整備、再編の動きが活発になっていた。そして、NPO法人アーツカウンシル高松設立、「高松市市民文化祭」から「高松市市民文化祭・アーツフェスタ高松」への名称変更及び、「アーツフェスタ高松事業運営委員会」への運営組織変更などの改変が進む中、新しい市民会館は、地域から世界へ向けての芸術発信基地となるべきだ、との声が高まっていた。

やがて、アーツカウンシル高松の中では「高松オペラシティ」への構想が主流となり、新しい市民会館開館記念のこけら落とし公演として、オペラ公演を提案することとなった。地元香川・高松の芸術界の力を集結して、新作オペラを創るべきとの意見が多かったが、応募期限までの時間がほとんどなく、制作は不可能であった。結局、海外の祝祭事業で公演されることが多いJ.シュトラウスⅡ作曲オペレッタ「こうもり(Die Federmaus)」と、高松と同じように「海の都」として発展してきた世界的な観光都市ヴェネツィアを舞台とした同じくJ.シュトラウスⅡ作曲オペレッタ「ヴェネツィアの一夜(Eine Nacht in Venedig)」の2作品を私から提案した。協議の末、知名度の高い「こうもり」がアーツカウンシル高松の理事会にて了承された。その後、2003年、サンポートホール高松を運営している高松市文化芸術財団によって最終決定されたのである。

ちょうどその頃、文頭で述べたように八木氏に呼び出され、古びた一冊の本とプログラムを渡された。それは、「脚本＝龍の子太郎・うぐいす姫ほか」著：瀬川拓男と香川二期会10周年記念コンサート(1965年)のプログラムであった。本には、瀬川氏が台本を書いた音楽人形劇、オペラ作品などの概要が紹介され、香川で発表されたオペラ「二人奥方」の概要を説明したページが含まれていた。また、プログラムには、初演となる合唱曲、民話による重唱曲集、そしてオペラ「二人奥方」が掲

載されていた。その頃、私は香川の最も古いオペラは、1997年「国民文化祭かがわ1997」にて創作されたオペラ「龍神の玉～海女の珠とり物語～」と考えていた。しかし、その古びたプログラムに記載されていたオペラ「二人奥方」の公演年が1965年となっていることから、オペラ「龍神の玉」よりも32年も前に上演されたことがわかった。そして、このオペラ作品こそ香川、いや四国で最初に創られた作品であることが予想された。

八木氏からは、自分が演出を担当し、当時の香川の芸術家が一丸となってこのオペラを制作したこと、初演後この作品が再演されることなく今日に至っていること、そして、いつの日か再演を果たしたいという熱い思いが告げられた。その頃私は、サンポートホール高松・こけら落とし公演「こうもり」の制作を担い、忙しい日々を送っていたため、この作品に大変興味が沸いたものの扱いに困った。とりあえず、詳しいことを聞くために制作関係者を探した。既に台本作家の瀬川氏は亡くなられていたが、作曲家の菅野氏は、ご高齢ながらもご存命と聞き、2003年7月に、菅野氏に会うために上京した。

菅野氏とは、新宿のプリンスホテルのカフェでの待ち合わせだった。そこに現れたのは、品格を備えた長身の老紳士であった。私は、菅野氏にお会いできた喜びと、オペラ「二人奥方」の作曲者から直接、話を伺える感動で、少し興奮気味になっていたが、まずは、今、進みつつある「高松オペラシティ」への構想、地域発のオペラ作品の必要性をお話した。菅野氏からはオペラ「二人奥方」の制作への経緯、作品の概要、菅野氏自身の作曲活動について何うことができ、その面談の中で菅野氏も、オペラ「二人奥方」の再演を強く望んでいることが確認できた。その面談の後半では、再演する際には、この作品の演奏時間が30分足らずと短いため、同時に上演する他のオペラ作品の必要性についての話になった。菅野氏は、オペラ「二人奥方」以外にもいくつかのオペラ作品を作曲していたのである。後日、菅野氏から再演の願いを託した手紙とこの時の話題に上がった菅野氏作曲のオペラ「イソップ物語」などの資料が送られてきた。

本論文では、地域発のオペラ創りを始めた際、貴重な出会いによって知り得た四国最初のオペラ「二人奥方」の制作について、今は亡き作曲家：菅野浩和氏、演出家：八木亮三氏からの情報、作品資料、制作時の記録、日本のオペラ制作の動向をもとに考察を行う。

また、この歴史的なオペラ作品制作の取り組みによる地域芸術における意義を掘り起こし、都市部ではなく、地方都市でのオペラ芸術における先人たちの想いを探りたい。

I. オペラ「二人奥方」が初演された演奏会の概要について

1. 公演名

香川二期会創立10周年記念特別演奏会

四国の民謡・民話による新音楽の創造 菅野浩和作品

主催 香川二期会、香川県教育委員会

後援 西日本放送・高松市教育委員会・香川音楽協会・四国新聞社

日時 1965(昭和40年). 2.21(日) 6.30PM

会場 高松市民会館

2. プログラム(香川二期会創立10周年記念特別演奏会プログラムより)

①合唱 三つの四国のうた <香川二期会依頼作品>

「五つ鹿踊」(伊予)

「舟唄」(讃岐)

「麦打唄」(阿波)

香川二期会合唱団、香川大学合唱団（賛助出演）

指揮　　：藤原 高夫
エレクトーン：和田 洋志
ピアノ　　：竹内 久美子
フルート　：川人 昭夫
他　しめ太鼓、大太鼓、鈴、木片、竹

②民話による重唱曲集

2重唱「おろかな嫁さま」（瀬川拓男作）

ソプラノ　：池本 洋子
アルト　　：山田 喜水
ピアノ伴奏：田村 秀子

4重唱「古屋のもり」（坪田譲治作）

ソプラノ　：空井 康江
アルト　　：吉馴 泰子
テノール　：木村 明昭
バリトン　：竹内 肇
ピアノ伴奏：竹内 久美子

③合唱 無伴奏混声組曲 「四国のわらべうた」＜香川二期会依頼作品＞

とんぼつり（土佐）
あの嫁さん（讃岐）
子守唄（讃岐の旋律）
お月さま桃色（土佐の旋律）
亥の子（伊予の旋律）
香川二期会合唱団
指揮：藤原 高夫

④歌劇「二人奥方」＜四国の民話より香川二期会依頼作品＞

瀬川 拓男作

演出　　：八木 亮三
照明　　：総合企画制作、市民会館照明部
美術　　：西日本デザイン研究所
衣装　　：中村 睦子
舞台監督：尾崎 彰
合唱　　：香川二期会合唱団
演奏　　：高松交響楽団

殿さま（バリトン） 川原 生佐六
奥方A（ソプラノ） 石井 ルリ子
奥方B（ソプラノ） 片山 恭子

医者(テノール) 中村 博之 賛助出演
*急病のため、二期会会員：島田 恒輔に変更
老僧(バス) 今田 靖
家来たち RNC放送劇団

指揮・作曲：菅野 浩和

3. 演奏形態・場面構成・時間データ(作曲家メモより)

歌劇「二人奥方」 Deuxmadams

作曲：1964年

演奏形態

人物：

狐、奥方B Soprano
奥方A Soprano
殿さま Baritono
医者 Tenore
老僧 Basso

楽器：

2 Flauti (1 muta a flauto piccolo)、2 Clarinetti
Percussioni (Wood-block、Bongo、つづみ、うちわだいこ、拍子木、祭り太鼓、木魚、念仏用鐘[大・小]、木桶*、どら、木片*、竹片*、灰皿*、座布団*、Xylophone、Vibraphone)
Violini I、Violini II、Viola、Violoncelli、Contrabassi
※は楽器ではないが叩いて使用する。

合唱：Coromisto

演奏時間：約28分

4. 場面構成と場面演奏時間

- ①導入の音楽 (1'50)
- ②殿さまの登場 (2'00) 自己紹介的に歌う。
- ③奥方の居間 (3'00) なんと、奥方が2人(一人は偽)いる。そこに入ってきた殿様がびっくり。
- ④医者 of 登場 (2'10) 殿さまの信頼の厚い医者が呼ばれてやってくる。
- ⑤奥方の居間 (2'10) 2人の奥方の前にやってきた医者に向かって、2人とももう一方が偽物だとわめきちらす。
- ⑥殿さまと医者 (1'40) 2人で策を構ずる。
- ⑦奥方の居間 (2'15) たくさんのいなりずしが運ばれると、一方の奥方は喜んでそれを食べ、狐ということがばれて捕えられ、火あぶりを宣言される。
- ⑧間奏曲 (1'10)
- ⑨狐の独白 (3'30) 狐は農耕の守り神だということを ariaふうにごう。
- ⑩奥方と家来たち (1'25) なんとか助けてやりたい殿さまに対して、奥方と家来たちは、火あぶりだと呼びまくる。

- ⑪老僧の登場 (4'20) そこに老僧が登場。助命を乞うが、一同ききいれず、その上老僧を狐の一味と見破る。老僧は魔法で一同を煙に巻いて、捕らわれの狐ともども姿を消す。
- ⑫結びの音楽 (1'20) 導入の音楽と対になるような物語の終わりを告げる合唱。

II. 作品制作にあたっての経緯

この作品は、昭和29年4月香川県下の若い演奏家・愛好家を中心となり、演奏活動を始めた香川二期会によって香川二期会10周年記念公演として初演された。香川二期会とは、既に、東京でオペラ事業を行っていた「二期会(現:東京二期会)」にあやかっつけられた名称であり、この2年前の昭和27年に東京において当時、活躍中の声楽家たちによって結成された団体である。それまでの声楽・オペラ活動を一期と考え、これからの次世代が創る声楽・オペラ活動を二期と考え付けられた名称である。この「二期会」の精神を、貧しくとも心としていこうとする県下の有志によって設立されたのが香川二期会である。その香川二期会が10周年を迎える年の記念公演として「四国の民謡・民謡に取材した洋楽様式による現代化」を試みようとした。当時、香川大学助教授であった藤原高夫が会長を務めていた香川二期会から、作曲家、音楽評論家として有名であった菅野浩和氏に作曲が依頼された。菅野氏は、オペラ「安達ヶ原の鬼女」を発表して評判となり、日本オペラ界では期待された人物であった。香川二期会が菅野氏に依頼した経緯は定かではないが、香川二期会は、名前が示すように東京の二期会(現:東京二期会)と関係があり、昭和36年の特別演奏会に二期会を代表するオペラ歌手:柴田睦陸、伊藤京子の両氏が出演していることから、東京でのオペラ事情を、入手しやすい状況であったと思われる。

菅野氏は、オペラ作品だけでなく、記念公演のすべての曲の作曲依頼を受け、公演では、オペラの他に合唱曲、重唱曲も作曲した。公演のテーマは、「四国の民謡・民謡による新音楽の創造」となり、菅野氏の初演作品の発表の場となるのである。

公演の前年の1964年に藤原高夫氏宅にて、香川演劇界の演出家であった八木亮三氏(RNC放送劇団)は、菅野・瀬川氏を紹介され、初のオペラ演出を任された。その後1965年1月4日、八木氏は、東京にてスタッフと打ち合わせを済まし、立稽古は、1月8日から始まった。立稽古は総合企画、RNC放送局のロビー、明善高校、藤原高夫氏宅にて行い、最後の通し練習は、高松市立四番丁小学校体育館において行われた。総合企画とは、音楽・映像・舞台の制作・企画会社で、事務所は、旧国道11号線観光通り沿いにあり、1Fが駐車場、2Fが事務所で、録音スタジオを所有し、ここで小規模な練習と打ち合わせが行われた。

舞台スタッフは、演出は八木亮三氏、装置は西日本デザイン研究所・宮田道雄氏、照明は総合企画制作・高松市民会館照明部が担当し、衣装は演出の八木氏のもとで放送劇の台本の勉強をし、舞台制作に関心を持っていた中村瞳子さん(朝日新聞支局長夫人)が担当。舞台監督は、四国新聞社からのちに総合企画の常務になった尾崎彰氏、助手は、保険会社から総合企画へ移った高尾哲生氏、プロデュースは、総合企画が担った。これらのことからオペラ「二人奥方」の台本・作曲以外の企画・運営・制作は、香川二期会会長であった藤原高夫氏、八木氏及び総合企画が中心となって進められたことが予想される。

音楽スタッフは、先に述べた東京で独自の創作オペラ及び人形劇オペラの作曲で注目されていた菅野浩和氏が作曲・指揮を、人形劇及び人形劇オペラの作家演出家として活躍していた瀬川拓男氏が脚本を担当した。オーケストラは、1951年8月緒方益罔氏が県内の有志を募って創立した高松交響楽団である。

キャスト、合唱は、主催の香川二期会が担当した。但し、医者役については、二転三転したらしく、台本には、ある音楽家の名前が消される形で残り、隣に東京の二期会準会員の中村博之氏が記されている。中村博之氏は、プログラムにもその名前が記されているが、瀬川拓男氏の上演記録には、後の洗足学園大学音楽学部教授でオペラ研究所長を務めた島田恒輔氏の名前が記されている。本番直前、プログラムが印刷された後に、何等かの事情により、交代するに至ったと思われる。

Ⅲ. 主なオペラ作品制作者について

1. 香川二期会(オペラ公演までの香川二期会の変遷)

香川二期会10周年記念公演のプログラムには、このオペラ的主催者は香川二期会、香川県教育委員会とあるが、主に制作を担ったのは、香川二期会である。

演奏団体である香川二期会は、10周年を迎えるまで、年に一回以上のペースでコンサート活動を続け、昭和35年には組織を拡大して合唱団を創立、演奏の実力も向上し、昭和38年にはモーツァルトの三大オペラに挙げられるオペラ「フィガロの結婚」を演奏会形式で行える程までに成長している。上記以外に月例発表会74回、また、養護施設慰問活動を展開していたことも実力向上に役立ったと思われる。このほかに、香川県芸術祭で行われたベートーヴェン「第九」公演に参加することで、オペラ制作に欠かすことのできない県下の様々な分野の芸術家・芸術団体との関係が深まったに違いない。当時、香川二期会の会長としてオペラ公演を牽引したのは、四国合唱連盟の理事長でもあった香川大学の藤原高夫助教授であった。

オペラ公演までの香川二期会の詳しい変遷は、以下の通りである。

創 立	昭和29年 4月
第一回定期演奏会「シューマンの夕べ」	昭和29年 7月24日 明善高校体育館
第二回定期演奏会「独唱・重唱・ピアノ・ヴァイオリン独唱・重唱・ピアノ・ヴァイオリン・フルート独奏」	昭和30年 4月 5日 県公会堂
第三回定期演奏会「シューベルトの夕べ」	昭和31年 1月 5日 県公会堂
第四回定期演奏会「モーツァルトの夕べ」	昭和31年 7月28日 県公会堂
第五回定期演奏会「独唱・重唱・ピアノソロ」	昭和32年 4月 4日 県公会堂
第六回定期演奏会「独唱・重唱・ピアノ・ヴァイオリンソロ」(第一回香川県芸術祭参加)	昭和33年11月29日 県公会堂
第七回定期演奏会「邦人作品の夕べ」(第二回香川県芸術祭参加)	昭和34年10月25日 県公会堂
香川二期会合唱団設立	昭和35年 7月 9日
第八回定期演奏会「アンサンブルの夕べ」(第三回香川県芸術祭参加)	昭和35年 9月10日 県庁ホール
県民におくる秋の音楽会	昭和35年10月22日 県庁ホール
第九回定期演奏会「ロマン派音楽の夕べ」	昭和36年 7月 9日 県庁ホール
香川二期会特別演奏会「柴田睦陸・伊藤京子共演」(第四回香川県芸術祭主催参加)	昭和36年11月16日 高松市民会館
第九交響楽記念演奏：合唱、ソリスト参加	昭和36年12月 高松市民会館
香川二期会合唱団出演(第五回香川県芸術祭主催公演参加)	昭和37年11月 高松市民会館

四国初オペラ「二人奥方」制作について

コンサートの夕べ	昭和38年9月14日	高松市民会館
演奏会形式歌劇「フィガロの結婚」(第六回香川県芸術祭主催公演参加)		
	昭和38年11月	高松市民会館
香川二期会合唱団出演(第七回香川県芸術祭主催公演参加)		
	昭和39年11月3日	高松市民会館
香川二期会創立10周年記念特別演奏会		
四国の民謡・民話による新音楽の創造 菅野浩和作品 歌劇「二人奥方」一幕2場		
	昭和40年2月21日	高松市民会館

オペラ「二人奥方」の公演後、残念ながら香川二期会は解散し、会員たちは、それぞれの道を辿り、香川の新しい音楽界(四国二期会・RNC児童合唱団・オペラ研究会など)を築いた。

しかし、附属合唱団であった香川二期会合唱団は、その後も存続し、昭和42年5月27日には、渋谷清壽氏指揮のもと第1回定期演奏会を開催し、50年が過ぎた現在も、香川を代表する合唱団として、合唱界を牽引している。

2. 脚本家・脚本について

劇作家の瀬川拓男氏は、この作品の作曲家の菅野氏と5本ほどのオペラ作品を残しているが、オペラ「二人奥方」は、4本目の作品である。前々年(1963)には、モノ・オペラとして話題を呼んだオペラ「安達ヶ原の鬼女」が邦楽四人の会によって発表された。この話は能の演目でもある謡曲「黒塚」あり、福島県二本松市安達ヶ原地方にまつわる「安達ヶ原の鬼婆」という有名な伝説でもある。

オペラ「二人奥方」は、「四国の民謡・民話による新音楽の創造」という公演のテーマの実現のため、香川二期会が、民謡・伝説をもとにした脚本を、作曲担当の菅野氏を通じて劇作家の瀬川拓男氏に依頼したものである。瀬川氏は、人形劇やオペラの脚本以外にも、日本の民謡の編集・研究を行い、人形劇・オペラの題材として活用していた。香川二期会がテーマとしたオペラ制作者として、当時、最も適した人物だったに違いない。台本の原作は、最終的に当時、未来社から出版された「四国の民謡」から「四国に狐が住まぬわけ」が選ばれた。その選定には、香川演劇協議会会長の近石泰秋(香川大学教授)の助言・協力があったといわれている。このオペラの原作として使われた民話は、松山市道後湯築城の城主であった河野伊豫守道直にまつわる話で、未来社が出版した以外にも似た話が幾つか愛媛には存在する。

編集者：松山市教育委員会文化教育課 昭和五十二年三月印刷発行

「市民双書16 松山のむかし話－伝説－」

・奥方に化けた古狐 【松山市道後公園】

・奥方はどっちが本物 ～狐がいなくなったわけ～ 【大島町】

また、この民話は、瀬戸内海を挟み対岸の尾道市にも、いたずら狐が、どこから、どうして来たのかを語った民話「海を渡ったキツネ」として存在している。

香川初のオペラの原作が、香川(さぬき)の民話でないことは少し残念な気もするが、この公演のテーマを考えると理解できる。また、お話の内容が、楽しい滑稽な、また四国共通の話題と言える「きつねのいない国」「たぬきの国」「たぬき伝説」に繋がることから、四国に住む人たちの興味を引くお話であることが伺える。この脚本作りに秘められた意味は、地域の歴史教育、郷土愛、オペラの可能性を地域の人たちに広げ浸透させることを目的としたのではないだろうか。

～「二人奥方」までの脚本家：瀬川拓男氏の略歴～

- 1929年 東京都板橋に生まれる。
1955年 劇団「太郎座」を設立。動く絵話「どじ丸」NHKより放映、民話に取材した人形劇の作品を多数手がける。
1956年 「太郎座」は、動く絵話をユニークな手法を用い、テレビ部門で発展させた。
1958年 合唱曲「きつねのよめいり」を作曲家：菅野浩和氏と初制作。
1960年 合唱オペラ「うぐいす姫」（菅野浩和：作曲）CBC放送民放賞コンクール2位受賞、NHKより合唱曲「やまうばのおめでた」「赤神と黒神」発表。
1961年 NHKより人形劇「龍の子太郎」放映される。オペラ「めっこ狸」（菅野浩和：作曲）、「姫川の歌」（古川太郎：作曲）発表。
1962年 菅野氏作曲の人形オペラ「うぐいす姫」、仮面劇「竜飛の神の物語」を公演。
1963年 邦楽器によるモノ・オペラ「安達ヶ原の鬼女」（菅野浩和：作曲）を公演。
1964年 TBSより「龍の子太郎」の連続放映。児童福祉文学賞受賞。

3. 作曲家・作曲について

「四国の民謡・民話による新音楽の創造を」テーマとし、新作オペラを創るとなれば、この当時の日本音楽界では、菅野氏が第一人者と言っても過言ではないだろう。彼は、既に音楽評論家としても活躍し、のちには北欧作曲家についての著書を残しているが、1963年には、先に述べたように、オペラ「安達ヶ原の鬼女」を発表し注目を浴び、日本オペラ界の期待された人物であった。日本オペラの大きな流れでは、團伊玖磨が1952年に日本のグランドオペラともいえる演奏規模の大きいオペラ「夕鶴」を作曲した。木下順二の民話「鶴の恩返し」を木下順二が戯曲化したものである。菅野氏はその路線ではなく、民話本来の趣を残し、音楽を取り入れた簡素で素朴な形での再生を試みていた。それは、1958年から共にTV人形劇や人形劇オペラ制作を行っていた日本の民謡・民話の研究者また、脚本家：瀬川氏の影響であることは疑いえない。菅野氏は、オペラ「二人奥方」までは、主役2名・簡素な合唱・器楽演奏者2名歌手のオペラ「ごんぼうぎつね」、歌手1名、邦楽演奏者4名のオペラ「安達ヶ原の鬼女」などの簡易なアンサンブルの少人数オペラしか手掛けていなかった。このオペラにて、歌手5人、合唱、独特の編成小オーケストラという菅野氏にとってそれまででは、最大規模の編成の曲に仕上げた。菅野氏のオペラ作品は、幾度か再演されてはいるが、このオペラ「二人奥方」は、残念ながら未だに再演されていない。その理由として、瀬川氏は、この編成の規模が大きいことを挙げているが、当時の出演者から「とても難しかった」という感想もある。香川二期会は、オペラ「二人奥方」公演の2年前にオペラ「フィガロの結婚」を演奏会形式でしたばかりで、それまでも、歌曲中心の演奏であったことから、まだまだオペラ作品になれていなかったと思われる。また、日本語と演劇としての効果を重視した作風であり、日本語のリズム、変拍子、間の取り方が、独特であり、菅野作品は、古典・ロマン派音楽にあこがれの強かった当時の歌手にとって、理解し難かったのかもしれない。

～「二人奥方」までの作曲家：菅野浩和の略歴～

- 1923年 東京に生まれる。
1949年 東京音楽学校選科作曲科終了。
在学中は、作曲法を石桁真礼生氏に師事。以前から山本直忠氏に音楽理論・和声学・作曲法・管弦楽法を指導される。
北村維章指揮のアンサンブル・ポピュレールのアレンジャーとして多数編曲。

- 1951年 印牧季雄舞踊グループの作曲家として、舞踊曲の作曲・指揮を始める。
1953年 東京文化短期大学講師となる。
1954年 批評活動開始
1958年 フランス人牧師ポール・アヌイ (Paul Anouilh) にグレゴリオ聖歌とラテン語を師事。瀬川拓男・松谷みよ子の主宰する人形劇団「太郎座」の専属作曲家になり、主にNHK放送のために多数の劇音楽を作曲、その演奏を指揮する。
1961年 歌劇「ごんぼうぎつね」初演。NHKより人形劇「龍の子太郎」放映される。オペラ「めっこ狸」(瀬川拓男：脚本)初演。
1962年 瀬川氏脚本の人形オペラ「うぐいす姫」初演。
1963年 邦楽器によるモノ・オペラ「安達ヶ原の鬼女」(脚本：瀬川拓男)初演。

4. 演出家・演出について

演出を担当した八木亮三氏は、終戦後、昭和22年ウズベキスタンから大阪に戻り、劇団活動を行った。昭和30年に小豆島に帰り、昭和35年RNC放送劇団(昭和34年7月創立)の講師として高松に招かれることになった。その頃、小豆島農民歌舞伎の調査を委託され進めていたが、その調査対象に離宮八幡神社で行われる肥土山農民歌舞伎が入っていた。そこには、衣装蔵(衣装約620点をはじめ、大道具、小道具、かつら約50点などを保存)があり、八木氏は、オペラ「二人奥方」の公演に必要な奥方用のかつらを、この衣装蔵から借りたとの談が残っている。

八木氏は、昭和36年から長きに亘り、香川県芸術祭運営委員を務め、2004年から2008年体が不調になるまで、運営委員長の重責を果たした。香川大学助教授で合唱連盟の理事長でもあった藤原孝夫氏とは、第4回香川県芸術祭運営委員会で出会った。

八木氏は、公演の前年1964年に藤原氏宅にて菅野・瀬川氏を紹介され、「自由にやってくれ」と初のオペラ演出を任せられたらしい。二人奥方の演出を依頼された八木氏は、台本を書いた瀬川氏に演出プランを相談し、「三文オペラ」で知られるドイツの演出家ベルトルト・ブレヒトの理論を取り入れ「異化効果」の方法で演出することの承諾を得た。八木氏はその手法のもと客観的な観点により、狂言風な演出効果を取り入れ、抒情味、滑稽味を交錯させた作品に仕上げた。のちに八木氏は、急遽代役を務めた島田氏がその意図をよく理解し、好演してくれたと語っている。

この作品は短編のオペラながらもいくつかの場面構成でできているオペラのため、短時間での場面転換や作業が必要である。映像の記録が見つからず、実際どのような演出だったかの確認は難しいが、台本・楽譜の記載から見て、ステージ中央奥に奥方の居間を置いた第一幕。処刑用の十字の柱、火あぶり用の薪などが置かれた第二幕に分けられ、殿様と医者 of のやり取りなどは、下手前方か花道でおこなわれたのではないだろうか。演出方法によっては、大道具一セットのみでも演出も可能と思われる。演出として難しいのは、狐の好物「おいなり」を貪り食うあまり、奥方に化けた狐が尻尾を出してしまうシーンだが、八木氏は、偽奥方の着物の帯の中に尻尾を隠させ、「おいなり」を食べている最中に尻尾を出させたようである。

IV. まとめ(その当時の日本のオペラ事情と「二人奥方」制作)

日本オペラの制作はオペラ「二人奥方」制作の60年前の北村季晴オペラ「露営の夢」から始まった。西洋から入ってきたオペラに、日本古来の伝統的な舞台芸術、歌舞伎・能・狂言などの影響を加えながら、早い歩みとは言えないが、徐々に盛んになっていった。大きな動きと思われるのはオペラ「二人奥方」が登場するよりも13年前に、今なお日本を代表するオペラ「夕鶴」、11年前にオペラ「修善寺物語」などが、西洋の作曲技法に日本独自の旋律、音楽手法、また新しい試行を取り込み製作

されたことである。その影響下、日本オペラの作品数が急増する。しかし、その場所は都市部の東京・大阪・京都のみの活動であり、地方でのオペラ制作は、それまで皆無と言っていい状態であった。調査すると、1959年岐阜で創られたと言われる松本民之助オペラ「かぐや姫」、菅野氏により郡山労音によって製作された1961年オペラ「ごんぼうぎつね」、1963年オペラ「安達ヶ原の鬼女」しか確認できなかった。このような日本のオペラ事情から見て、交通の便、情報伝達の悪い地域の四国で、1965年オペラ「二人奥方」が早々と制作・公演されたのは驚くべきことであり、私たちの先人でもある当時の香川の芸術家たちの芸術活動への情熱、志の高さを知ることができる。また、サブタイトルが「四国民話より香川二期会委嘱作品」であり、「香川の民話より・・・」とされていないところに、地域の歴史・文化への想いの強さや、オペラ活動が香川県だけでなく4県を含めた四国全体への広がりを感じ取れていることが読み取れる。本論文で取り上げた作曲、脚本、演出、主催者以外にも、オペラ制作には、演奏者はもちろんのこと、舞台美術、照明、衣装、メイクなど多くの分野の専門家が必要となる。当時の香川の状況から考えて、オペラに関わったことのない、また観たこともないであろうスタッフは、何回も試行錯誤を繰り返し、大変苦勞したに違いない。

今、四国のオペラ活動は、四国二期会が中心となり、いくつかのオペラ団体が芸術分野の枠を越えて地域の芸術文化団体の協力のもと続けられている。54年前、香川二期会が、県内の主要な芸術団体・文化人を集結させ、それまでの枠を外して協力し、成し遂げたオペラ制作事業、この功績は非常に大きい。

最後に私たちの先人たちが残した「四国の音楽文化遺産」と言えるオペラ「二人奥方」の再演を強く願いたい。

文献

- 瀬川拓男(1976)「脚本＝龍の子太郎・うぐいす姫ほか」一声社
関根礼子(1983)「オペラの世界」三一書房
小泉文夫(2003)「人はなぜ歌うのか」学習研究社
門馬直美(1982)「Grand Opera Vol.30」サントリー音楽財団
松山市教育委員会(1977)「市民双書16 松山のむかし話－伝説－」
香川二期会(1965)香川二期会創立10周年記念特別演奏会プログラム